

I. 教室活動の流れ

1. 個人ファイル+教材渡し
2. 学習者が各項目に関してできるかどうかのチェック
3. プログラム・コーディネーターによるコミュニケーション行動のモデル例示（活動の流れの提示）
4. グループでやってみよう（学習者がどこまでできるか、どんな表現が使えるかを出させる）
5. みんなで使える表現を確認（4で出したものを発表。間違いがあるものは訂正する。）
6. 5で確認した表現を使って、もう一度コミュニケーションをする。
7. 発表などを通したまとめの活動
8. 今日の活動を通して、各項目ができるようになったかどうかのチェック
9. 教材回収・保存

II. 日本語を身につけるということ

- ・教科書で勉強するよりも、実際に使ったほうがよく覚えられて、使えるようになる。
- ・「実際に使う」というのは、与えられた内容を話すのではなく、自分が話したいと思うことを言葉に変えて、それを相手に伝えること。または、相手が伝えたい内容を理解すること。
- ・形や語の紹介→理解→練習だけでは能力は身に付かない。本当に上達する人は、とにかく「伝えたい」という気持ちと「内容」があり、それを実現しようとする。または、簡単な紹介だけでも、それを使って「伝えよう」とし、その試行錯誤の過程で文法・文型の意味、使い方を身につけていく。

III. 日本語パートナーとは？

- ・日本語を教えようとは思わない。正しい日本語を教える(又は指導する)教師ではなく、日本語で真のコミュニケーションを行うパートナーとして、日本語学習者と接する。
- ・教えるという立場ではなく、ともに学ぶという姿勢が大事。
- ・日本語を使う機会を多く与える。学習者は使う過程で試行錯誤しながら理解し、その結果、日本語を使う技術を身につける。

⇒具体的には？

- 相手がすぐに自分の言いたいことが伝えられなくてもとにかく「待つ」。相手が自分の持っている力を駆使して伝える努力をするのを「待つ」。
- 質問するときにも、答えるときにも、教科書的、教師的な受け答えではなく、本当に知りたいこと、聞きたいことを聞き、答える。それにより、新たな話題・興味が広がり、知りたいという気持ちが生まれるかもしれない。そのことが日本語を学びたいというモチベーションにつながる。
- 一度で伝わらなくても、相手が理解できるまで伝える努力をする。安易に翻訳に頼らない。それにより、学習者にとっても、日本人にとっても「わかりやすい日本語」を使う能力が身に付く。

IV. 考えてみよう！

- ・わかりやすい日本語とは？
- ・話を続けるということ
- ・相手がわからないときは？
- ・通訳の利用法